

〈論 文〉

漢文訓読と連文節

阿久津 智

要 旨

本稿では、漢文学習を視野に、漢文（中国古典語）の文の構造と日本語の文の構造とを対照して分析する方法（図解）について論じた。両言語は言語類型が異なるが、その対照には、文を階層的な句構造として分析する方法（句構造分析）が有効であり、これを用いるに当たり、漢文については、漢文訓読法に反映されている文構造のとらえ方を、日本語については、橋本進吉の「文節」や「連文節」の考え方を取り入れるのがわかりやすいと考えた。これは、漢文の「語」はほぼ日本語の「文節」に対応し、句構造を考える場合、漢文の「句」と日本語の「連文節」とを対応させて対照するのが適当だと思われるからである。

キーワード：漢文訓読，文節，句構造，連文節，構造の図解

1. はじめに

本稿では、漢文（古典中国語）の文の構造と日本語の文の構造とを比べて見るための分析方法（図解）について考えていく。これは、漢文学習において、（漢文訓読に反映される）文の構造を見るためのものであり、一方で、（漢文との対照から浮かび上がる）日本語の文の基本的な構造をとらえるためのものでもある。

言語の文法的な特徴、とくに文の基本的な構造における特徴は、その言

語を他の言語と比べることによってはっきりする⁽¹⁾。この点で、国語教育においては、漢文訓読がかっこうの材料となると思われる。日本語と漢文（古典中国語）とは、文法の形態的な特徴が大きく異なる。世界の言語の古典的なタイプ分け（類型論）では、日本語は「何かと助詞や助動詞がまとわりついてくる『膠着語』」とされ、中国語は「単語が一切の語形変化を起さず、常に一定の形を保って配置される『孤立語』」とされる⁽²⁾。言語類型が異なる言語どうしを比べることは、それぞれの言語の特徴を見るのに有効だと思われるが、そのためには、異なるタイプの言語を等しく扱える分析法が必要となる。これについて、本稿では、文を、その構成要素である「句」(phrase)が階層構造をもつものとして分析するやり方（句構造分析）が適当だと考えるが、この方法を用いるに当たり、漢文については、漢文訓読法に反映されている文構造のとらえ方を、日本語については、橋本進吉の「連文節」の考え方を取り入れるのがわかりやすいと考える。

以下、本稿では、まず、漢文訓読を通してうかがうことのできる、漢文における文の構造（図解）について触れ（2節）、次に、日本語の文の構造を分析する方法について検討を行い（3節）、つづいて、漢文と日本語とにおける文の構造の対照を、例を挙げて、行ってみたい（4節）。

2. 漢文訓読から見た漢文の構造

筆者は、先に、漢文訓読法をもとに漢文の構造を図解する方法について論じた（阿久津 2019）。そこでは、漢文訓読は漢文の構造を考えるのに大いに役立つものの、漢文訓読に使われる返り点は、（漢文と日本語とで語順の異なる部分について）読む順番を示すだけであって、漢文の構造をそのまま示すものではないことを指摘し、漢文の構造を示すためには階層的な句構造分析による図解が有効ではないかと述べた。

これは、たとえば、次のようなものである（以下、訓点付き漢文については、本来縦書きのものを横書きにし、返り点を下付きで、送り仮名を上付きで示す。語（句）（□で囲む）の間の関係を示すのに、矢印付き折れ線（以下「矢印線」）を用いる。矢印線は、広く「かかる語（句）→受ける語（句）」の関係（係り受け関係）、すなわち、「修飾成分（修飾語）→被修飾成分（主要語）」の関係（修飾関係）を示す）。

(01)

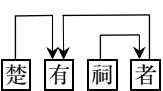
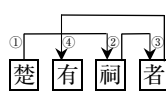
a. 訓点付き漢文

b. 訓読の順序

c. 構造（修飾関係）

d. 階層構造

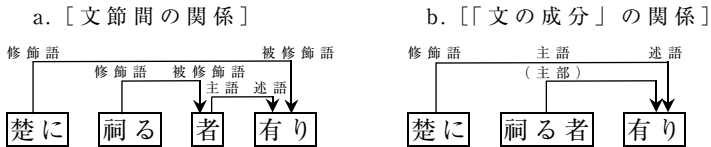
楚^ニ有^リ祠^ル者[。]
まつ 一
 （楚に祠る者有り）



例 (01 a) の返り点（一二点）は、「有」と「祠者」との順序を変えて読むことを示し、全体として、例 (01 b) のような順序で読むことを表すが、これは、この文の構造（修飾関係）をそのまま表すものではない。一方で、例 (01 c) に示した修飾関係は、必ずしも訓読する順序を示してはいない。この両者を統合的に示すには、例 (01 d) に見られるような分析を行う必要がある。例 (01 d) では、この文を、（内側から順に）まず「祠」と「者」とがまとまって「祠者」という句を作り、次いで、「有」と「祠者」とがまとまって「有祠者」という句を作り、さらに、「楚」と「有祠者」とがまとまって「楚有祠者」という句（＝文）を作る、というように分析している。また、訓読する順序は、「矢印線の始点が、より前、より内側にあるものから、矢印をたどって順に読む」（「より前」が「より内側」に優先する。矢印線は交差しない）という原則によって示される（例 01 d 参照）。ここからわかるように、漢文訓読には、漢文の構造が反映されている（返り点は、被修飾成分（主要語）が修飾成分（修飾語）に先行する場合にのみ使われる）。

一方、日本語の文の構造は、国語教育（学校文法）においては、文節間の関係、あるいは、「文の成分」の関係（のみ）で示される（分析される）ことが多く、階層的な構造分析によって示されることはあまりないようである⁽³⁾。たとえば、先の例の書き下し文（日本語文語文）「楚に祠る者有り。」の構造は、次のような係り受け関係で示されるであろう。

(02)



上では、階層的な構造分析は行われていない。しかし、日本語と漢文の構造を比べることを考えた場合、日本語と漢文（訓読）とを、同じやり方で分析する必要が出てくる。次節では、日本語の文の構造の分析について、少し詳しく見ていきたい。

3. 日本語の文の構造の分析

日本語の文の構造を分析する方法を考えるに当たり、ここでは、漢文（古典中国語）の文の構造と比べることを考えて、「わかりやすさ」と「比べやすさ」の2点を重視する。

「わかりやすさ」とは、具体的には、図解したときの見やすさ・わかりやすさのことであるが、これは、また、理論的な精確さや、原理的な一貫性・汎用性よりも、実用性を重んじるということでもある。そのため、たとえば、文に（表面上）現れないものを設定する（基底構造のようなものを考える）ことなどは（なるべく）行わない。

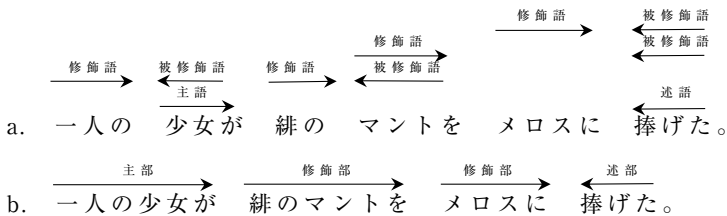
「比べやすさ」とは、漢文の構造との比べやすさのことである。この点からは、前節に挙げた漢文の構造分析に近い分析方法（図解）が望まれる。漢文にない要素（助詞や助動詞）の機能を重視するような分析法は（なるべく）避ける。

以下、まず、学校文法における文節を中心とした見方を取り上げ、つづいて、それとは異なる立場からの見方に触れ、次いで、橋本進吉の「連文節」の考え方を取り入れた分析法（図解）を示す。

3.1 学校文法における文の構造の見方

前節でも述べたように、学校文法では、文の構造は、係り受け（修飾）の関係（文節間の関係、または、「文の成分」の関係）で示される。例を挙げてみる（伊坂 2013: 93 による。原文は縦書き）⁽⁴⁾。

(03)

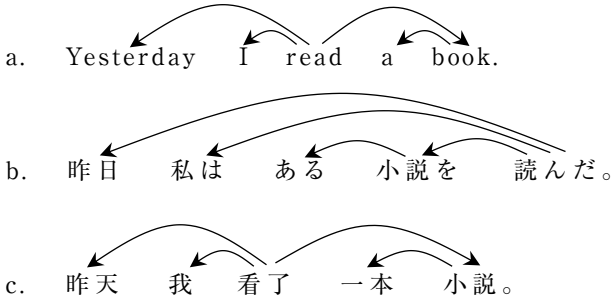


例 (03 a) は、文節間の係り受け関係を示したものであり、例 (03 b) は、「文の成分」の係り受け関係を示したものである。

ここに示されているような構成要素間における関係は、言語一般に見られるもので、言語学ではこれを「依存関係」(dependency)と呼んでいる（風間ほか 2004: 13）。依存関係を中心とする統語論は「依存文法」(dependency grammar)と呼ばれるが、その文の構造の分析方法には、上の図解に近いものもある。たとえば、依存文法の一つであるハドソンの「語

彙文法」(Word Grammar)では、英語、日本語、中国語の文における依存関係は、次の例のように図示される(中国語は、現代日本語の通用字体で示す)⁽⁵⁾。

(04)



例(04)の図解では、矢印の方向が、学校文法における「かかり」(修飾)を示す矢印と逆になっている。これは、依存文法では、構成要素間の関係を、「支配-依存(従属)」(支配が被修飾、依存が修飾に相当)ととらえることによるのであろう⁽⁶⁾。

さて、上の例からもわかるように、日本語の文節は、英語や中国語における「語」(word)に相当する(これは漢文(古典中国語)でも同様である)。これらの言語の文と日本語の文との対照では、大まかにいって、語と文節とを対応させることになる。その点で、文節は、依存(係り受け)関係による文の分析にとって有効な単位だといえる。また、この点において、「『文節』こそがほんとうの意味の単語(単位となるコトバ)」(鈴木1972: 63)とする(上の例04でいえば、「私は」、「小説を」、「読んだ」のようなまとまりを「単語」と認める)立場があるのも首肯できる⁽⁷⁾。

「文節」は、学校文法の基になった橋本進吉の文法論では、「文を実際の言語として出来るだけ多く句切つた最短の一句切」(橋本1934: 7)として

定義される。それは、また、「意味を有する言語単位」でもあり、橋本文法の特徴は、「文節の職能という点に、意味と外形との接合点を求めた」点にあるとされる（永野 1959: 94-95）。文節は、「外形」に基づくことから、あいまいさが少なく、区切りやすい単位といえる⁽⁸⁾（ただし、「書いている」や「読んでしまう」のように、文節に区切りにくいものもある⁽⁹⁾）。

一方で、文節に基づく文の構造の分析には、文の構造を正確にとらえきれないという問題が指摘されている。これについては、連体修飾の問題（たとえば、例 (03) において、「一人の」がかかるのは、「少女が」（文節）ではなく、「少女」（単語）と見るべきだ、というようなこと）が取り上げられることが多いが、ここでは、漢文との対照を考えて、連用修飾の問題を取り上げておきたい。これは、（連体修飾の場合と同様に）修飾語のかかる先が文節（全体）ではなく、単語（文節の部分）と考えたほうがよい場合があるというものである。その例として、否定文と使役文とにおける構造的あいまい文（両義文）を取り上げる。

否定文では、たとえば、「春子はいつも遅刻しない。」という文には、「a. 常に定時に来る」、「b. 常に遅刻するわけではない」という2つの解釈があるが、b. の意味に解釈するには、「いつも」は「遅刻しない」（文節）全体ではなく、「遅刻し（遅刻する）」のみにかかると考えなければならない（下の例 05 b）⁽¹⁰⁾。

(05)

a. 春子は $\xrightarrow{\hspace{1cm}}$ いつも $\xleftarrow{\hspace{1cm}}$ 遅刻しない。

b. 春子は $\xrightarrow{\hspace{1cm}}$ いつも $\xleftarrow{\hspace{1cm}}$ 遅刻しない。

また、使役文では、たとえば、「二郎にすぐに返事を書かせる。」という文には、「a. 『書きなさい』とすぐに指示する」、「b. 『すぐに書きなさい』

と指示する」という2つの解釈があるが、b. の意味に解釈するには、「すぐに」は「書かせる」（文節）全体ではなく、「書か（書く）」のみにかかると考えなければならない（下の例 06 b）⁽¹¹⁾。

(06)

- a. 二郎に $\xrightarrow{\hspace{1cm}}$ すぐに 返事を $\xleftarrow{\hspace{1cm}}$ 書かせる。
b. 二郎に $\xrightarrow{\hspace{1cm}}$ すぐに 返事を $\xleftarrow{\hspace{1cm}}$ 書かせる。

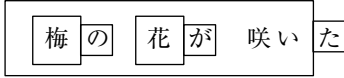
ここで、打ち消しの助動詞「ない」は、漢文では「不」（訓読は「ず」）に当たり、使役の助動詞「せる」は、漢文では「使」、「令」、「教」、「遣」など（訓読は「しむ」）に当たる。先に、日本語の文節は、漢文の語に相当すると述べたが、この「不」や「使」などは、漢文で1語であるが、日本語では、文節（全体）ではなく、文節の部分に対応している。つまり、このようなものについては、漢文との対照を行う場合（あるいは、係り受け関係を詳しく見る場合）には、文節以下のレベル（学校文法でいえば、単語単位）まで分析する必要があるということになる。次項では、文節とは異なる単位によって、文の構造を考える見方についてふれる。

3.2 学校文法とは異なる文の構造の見方

日本語の文の構造を、文節とは異なる単位によって、（階層構造として）考える文法論としては、時枝誠記の学説が代表的なものである。時枝文法では、「語」を、「客体的表現」である「詞」（名詞・動詞・形容詞など）と「主体的表現」である「辞」（助詞・助動詞など）とに分け、この両者が結合した「句」を統語論的単位とする。「句」は「詞が辞によって包まれ統一されたもの」で、「句+詞」がまた「詞」に相当する単位となり、これに「辞」が付くことによってさらに大きな「句」が形成されるとする。時枝は、このような構造を「入子型構造」と呼んでいる（時枝 1950:

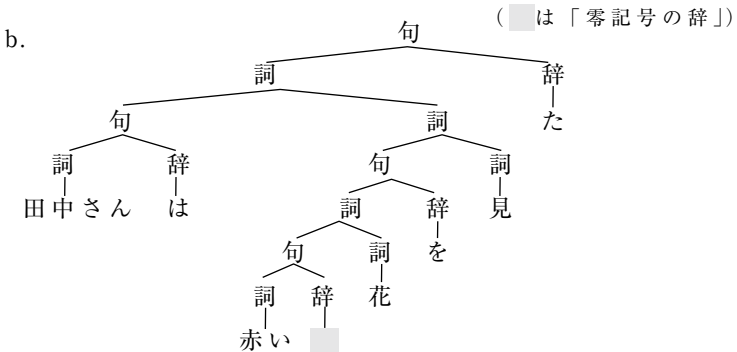
250)。時枝の例を挙げる（原文は縦書き。詞辭が句になる）。

(07)



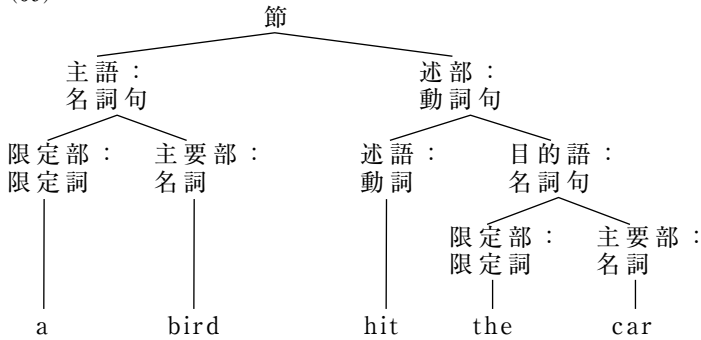
この分析は、(図解の方法は異なるが) 生成文法の統語論で行われる句構造分析に近い。金水 (1997: 145) は、「田中さんは赤い花を見た」という例文を挙げ、これを、次のように、時枝式の入子型の図式 (08 a) と、句構造式の樹形図 (08 b) とで表し、入子型の構造分析は、「句構造文法とほぼ等価である。」としている⁽¹²⁾。

(08)



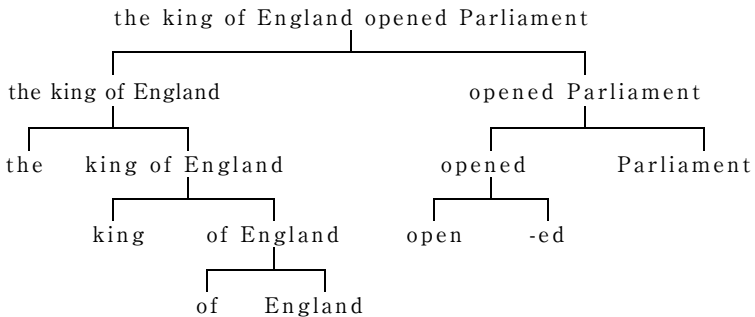
このような句構造分析（樹形図）は、英語学でよく使われる。英文法書から例を挙げておく (Huddleston and Pullum 2017: 56)。

(09)



文を階層構造として分析するやり方は、アメリカ構造言語学の「直接構成要素分析」(IC分析)に始まる。これは、文などの構造体を、それを直接構成する要素(immediate constituent, 略して「IC」)に分割(二分)していき、これを最小の構成要素に至るまでくり返すことによって、文の構造を考えるやり方である。たとえば、「The king of England opened Parliament.」という文は、次のように分析(図解)される(田中ほか1975: 104)⁽¹³⁾。

(10)



IC分析には、ほかに、次のようなやり方もある(上の例文を別方式で図解する)。

(11)

a.

the	king	of	England	open	-ed	Parliament
-----	------	----	---------	------	-----	------------

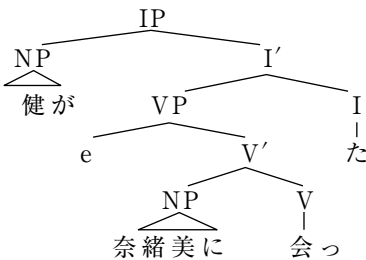
b.

the	king	of	England	open	-ed	Parliament
		of England				
king of England				opened		
the king of England				opened Parliament		
the king of England opened Parliament						

例 (11 a) は, Fries (1957: 272) に従ったもの, 例 (11 b) は, Hockett (1958: 152) に従ったものである⁽¹⁴⁾。IC 分析では, 基本的に, 大きい単位から小さい単位へと進む手順がとられる (田中ほか 1975: 105)。

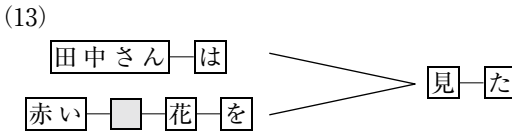
このような構造分析のやり方は, 生成文法の句構造分析に受け継がれている。とくに, その主要な理論である「Xバー理論」では, IC 分析の二分除法に, 依存関係 (支配-依存) の考え方を取り入れ, 句を作る2つの要素のうち的一方が主要部 (支配部) となっており, その句の性質を決定する (その句には, 主要部の性質が「投射」される) と考える (分析は, 小さい単位から大きい単位へと進められる)。日本語の文の分析例を挙げておく (郡司 2002: 203 による)⁽¹⁵⁾。

(12)

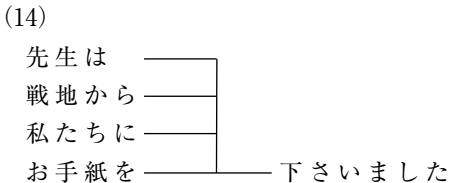


ここには、2つの要素（依存部（左）-主要部（右））のまとまり（句）が階層構造をなすというとらえ方が見られる（V（動詞）に対し、V'やVPは、Vの性質が投射された句を表す。I（屈折辞）についても同様）。

さて、ここで、例（08 a）の入子型の図式に戻ると、この図は、（例 08 bとは別のとらえ方として）「田中さんは」と「赤い花を」とを並立させているようにもとれる⁽¹⁶⁾。そうとれば、たとえば、これを、「田中さんは」と「赤い花を」とを同列に並べて、次のように示すこともできるだろう。



このように、1つの述語にかかる要素（あるいは、1つの述語が支配する要素）を同列に並べて、文の構造を示す分析法（図解）もある。



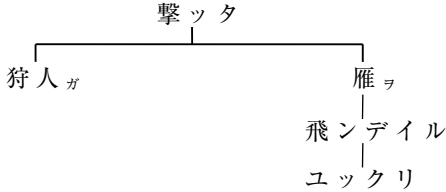
例（14）は、橋本（1953: 19, 1959: 186）が「連文節」によって分析（図解）している例文（例 18 b 参照）を、「多元」⁽¹⁷⁾（森岡 1964: 4）、あるいは「多枝式」（渡辺 1965: 61）にして示したものである（両者の図解は同じ。原文は、いずれも縦書き）。この図解は、述語とそれ以外の要素との間の係り受け（依存）関係を示すものとなっている。

さらに、依存関係が連続する場合には、たとえば、次のように分析（図解）される。

(15)

弥高山—の—頂上—の—近く—に ●
 プレハブ—の—山小屋—が— あった—よ。

(16)



例 (15) は、長田 (1995: 75) の「意義の繋がり」の図（原文は縦書き）、例 (16) は、仁田 (1980: 30) の「依存関係図」である。

この項の最後に、これまで見てきた文の構造の分析法を、大きく、(1)最小の構成要素を、文節（相当の単位）とするか、あるいは、形態素（語）とするか、(2)文の構造を、依存関係を中心にとらえるか、あるいは、階層構造を中心にとらえるか、という2点からまとめておく（表1）。

表1 文の構造の分析法

	(1)最小構成要素	(2)文の構造のとらえ方
A	文節	依存（係り受け）関係中心
B	形態素（語）	階層（句）構造中心
C	形態素（語）	階層（句）構造 + 依存（係り受け）関係
D	文節	依存（係り受け）関係 + 階層（句）構造

Aには、学校文法が含まれる。森岡（1964）や仁田（1980）の分析もこれに含まれるであろう。Bには、IC分析が含まれる。Cには、Xバー理論が含まれる。時枝文法（入子型構造）も、Cに含まれるであろうか。Dには、次項で見る、橋本進吉の連文節による分析が含まれる。

3.3 「連文節」による文の構造の見方

これまで見てきたことをふまえると、(漢文と対照するための)日本語の文の構造の分析法を考えるに当たっては、次の点を考慮に入れるべきではないかと思う。

- ・(漢文の語に相当する)文節を主な単位とする。
- ・係り受け(依存関係)を基にして、階層構造を考える。

この2点を取り入れた分析は、橋本進吉の「連文節」による文の分析(表1のD)に近いものになると思われる。

橋本進吉は、晩年に、文の構造を見るのに、「二つの文節のうけつづきの関係」だけでは不十分であるとして、「いくつかの文節の結合したもの」である「連文節」を導入し、そこに「段階」を認めた。橋本(1953: 14-15)は、文節の「結合関係」には、(a)「前を受けて後へつらなるもの」(「一系列の文節」)と、(b)「いくつかの文節を隔てて後の文節につらなる」(「意味から言ふといくつかの文節を合せて一まとまりになったものにかかつてゆく」)ものがあるとしている。それぞれの例を挙げる。

(17)



- a. 不意を | くらつた | 敵は | あわてた
- b. 先生は | 戦地から | 私たちに | お手紙を | 下さいました

(18)

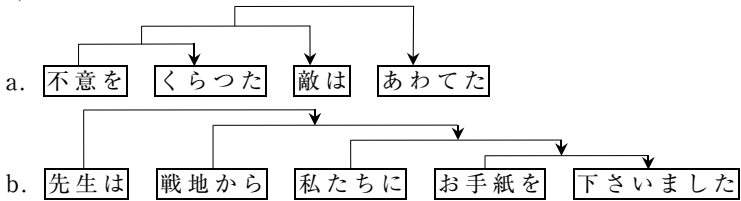
- a. 不意を | くらつた | 敵は | あわてた ||
- b. 先生は | 戦地から | 私たちに | お手紙を | 下さいました ||

例（17）は、「二つの文節のうけつづきの関係」だけを表したものである（橋本 1953: 14。原文は縦書き）。例（17 a）は、「不意を」が「くらつた」にかかり、「くらつた」が「敵は」にかかり、「敵は」が「あわてた」にかかることを表し、例（17 b）は、「先生は」が（3つの文節を隔てて）「下さいました」にかかることを表している。

これに対して、例（18）は、連文節による分析である（橋本 1953: 19, 1959: 185-186。原文は縦書き）。例（18 a）は、「不意をくらつた」が「第一次」の連文節となり、「不意をくらつた敵は」が「第二次」の連文節となり、この文全体が「第三次」（最高次）の連文節となることを表している（なお、数字は、「断正文節」（言い切りになる文節）へのかかりの隔たり（等次）を表す。（）内の数字は連文節の等次（＝その連文節内の最後の文節の等次））。例（18 b）では、「お手紙を下さいました」が「第一次」の連文節となり、「私たちにお手紙を下さいました」が「第二次」の連文節となり、「戦地から私たちにお手紙を下さいました」が「第三次」の連文節となり、この文全体が「第四次」（最高次）の連文節となることを表している（・は「中断点」（前の文節が直後の文節に続かないところ）、∨は「接合点」（中断点のある文節を受ける文節）を表す）。

この分析法（図解）は、前項で見たような、要素を線でつなぐ形にも書き換えが可能であるが（例 18 b については、例 14 参照。例 18 a については、「不意を一くらつた—敵は—あわてた」のようになる）、その場合、（連文節としての）意味上のまとまりはわかりにくくなる⁽¹⁸⁾。とはいえ、例（18）の分析（図解）は決して見やすいものではない。そこで、ここでは、これを簡略化し（数字や記号、下線を省略し）、をに改めて、示してみたい。これは、2 節で示した、漢文の分析法（図解）と同じものになる。

(19)

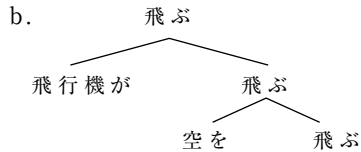
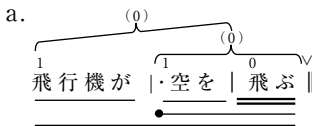


ところで、今日の学校文法における「連文節」は、橋本の「連文節」とは性質がやや異なる。学校文法における「連文節」は、2つの要素間の「相互の承接関係」を示すときには使われず、文中における「絶対的な役割」というべき「文の成分」を示すときにのみ使われる単位のようなのである(伊坂 2013: 93-94)⁽¹⁹⁾ (これに対し、文節は、2文節間の相互関係を表すときにも、文の成分を示すときにも使われる。例 03 参照)。「文の成分」には、文節がなることも、連文節がなることもある。たとえば、例 (03) の「一人の少女が緋のマントをメロスに捧げた。」という文の「文の成分」については、主語(主部)の「一人の少女が」と、修飾語(修飾部)の「緋のマントを」とは連文節であり、修飾語の「メロスに」と、述語の「捧げた」とは文節である。

さて、橋本の連文節論では、文の分析は、「文→文節→連文節」という過程をたどる(橋本 1959: 179)。「文節→連文節」に関していえば、小さい単位(下部、部分)から大きい単位(上部、全体)に向かうことになる。これは、生成文法の分析と共通する。畠山ほか(2019: 144)によれば、橋本の連文節論は、「生成文法の最新版」であるミニマリスト・プログラム(最小句構造理論)の考え方の先駆をなすものであるという。両者の共通点としては、「2項枝分かれ」で「構造の下部から上部に向かって構造が積み重なっていく」ほか⁽²⁰⁾、たとえば、「橋本が用いている《結合》と《連文節》という用語は、生成文法の《併合》と《構成素》にそれぞれ置き換えることができる。」、橋本の「中断点『・』が付けられた文節か

ら、接合点『∨』の付けられた文節への] 係り受けは、生成文法で用いられる c [構成素] 統御を援用することで構造的に表すことができる。]（「『かかる』は、[中略]『c 統御する』で言い換えることができる。』」などとされる（畠山ほか 2019: 146-151。[] 内は筆者による。以下同じ）。以下に、「飛行機は空を飛ぶ」という文の分析を挙げる。

(20)



例 (20 a) は、橋本 (1953: 19, 1959: 186) の分析（原文は縦書き）、例 (20 b) は、畠山ほか (2019: 146) の「最小句構造理論」による分析である。ここで、前者の \frown は、後者で \sphericalangle になり、前者の「(0)」は、後者で「飛ぶ」になっている（「(0)」を、「0」の付いた「飛ぶ」の「投射」と見る）。このように、橋本の連文節による分析は、句構造分析の一種と見ることができる。

一方、橋本の、文節から連文節に向かう分析法には、批判も多い。たとえば、鈴木 (1974: 29) は、「連文節は、文節を設定した上で、文節相互の意味関係の点から設定される。つまり、 \sphericalangle 文→文節→連文節 \sphericalangle の経過を辿る。しかし、文を分析する場合には、 \sphericalangle 文→連文節→文節 \sphericalangle という経過をとるのが自然ではなかろうか。」と述べている（ \sphericalangle は改行を示す）。

また、北原 (1980: 74-75) は、佐伯梅友の文法論（文法教科書）の解説の中で、次のように述べる（傍点は省略）。

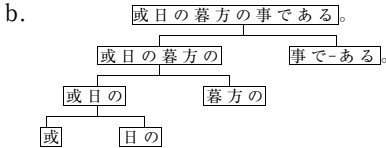
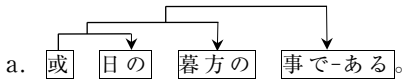
文節の係り受けを考える文法論では、まず文を文節に区切って、しかる後に文節と文節との係り受けの関係を調べることになる。「赤い花

が」はまず「赤い」と「花が」とに句切られる。だから、「赤い」が「花」ではなく、「花が」にかかるということになるのである。しかし、文を文節に句切らずに、まず大きな係り受けの関係からみていくと、「赤い花が咲きました」は、「赤い花が」と「咲きました」との係り受けとみることができる。次に「赤い花が」は「赤い」が「花」にかかりそれに「が」が付いたものだと考えることができる。文をまず文節に句切るところにすべての問題が発しているのであるが、文の係り受けを大きい単位の係り受けから次第にその内部の係り受けへとみていけば、そういう問題は起こらないのである。

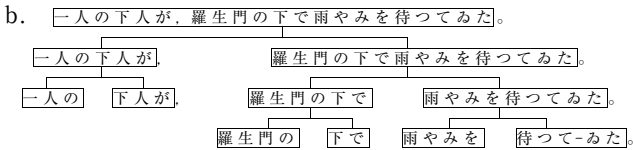
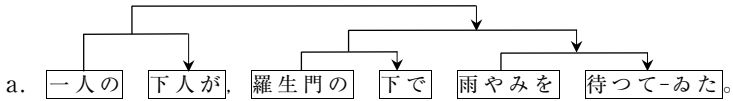
文の分析としては、技術的には、「文→連文節→文節」のように、大きい単位から小さい単位に向けて、(2つの要素に)分けていくのがやりやすいのかもしれない。これは、前項で見たIC分析の分析法である。

ここで、試みに、芥川龍之介の『羅生門』の冒頭部分(『芥川龍之介全集 第1巻』岩波書店1995:145による。ルビは省略)を、小さい単位から大きい単位へと向かう(かつ、係り受け関係を示す)、「文節→連文節」による分析(例19の方式。以下「連文節分析」と呼ぶ)と、大きい単位から小さい単位へと向かう(かつ、係り受け関係を示さない)、IC分析(例10の方式。ただし、文節を最小単位とする)とによって、図解してみよう(これは1つの解釈の例で、ほかの解釈もありうる。なお、扱いが問題になることの多い、補助動詞と形式名詞類については、補助動詞は、直前の本動詞と合わせて文節相当として扱うこととし(本動詞と補助動詞との間に「-」を入れておく)、形式名詞類は、橋本1953:19, 1959:185-191に従い、一般名詞と同様に扱っておく)。

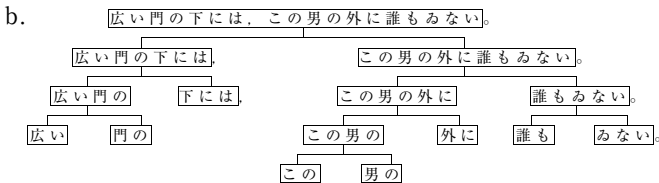
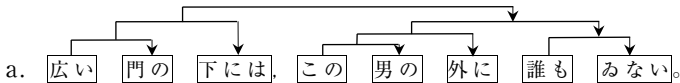
(21) 或日の暮方の事である。



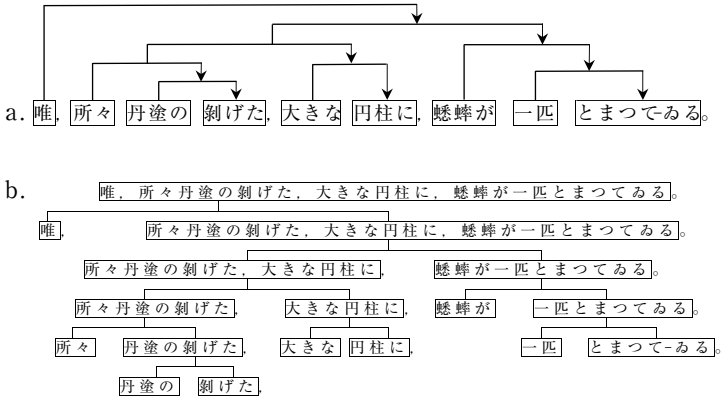
(22) 一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。



(23) 広い門の下には、この男の外に誰もゐない。



(24) 唯，所々丹塗の剥げた，大きな円柱に，蟋蟀が一匹とまつてゐる。



以上からうかがえるのは，文の（構成要素への）分節については，IC分析（それぞれの b.）のほうがわかりやすいが，構成要素間の関係については，連文節分析（それぞれの a.）のほうが見やすいということではないだろうか。連文節分析には，係り受けの方向がわかり，漢文訓読と対比しやすいという利点もある。また，連文節分析の矢印線は，それほどスペースをとらないので，行間に書き入れやすく，必要な箇所だけ書き込むこともできるという特長をもつ。いずれにしても，漢文の文の構造と対比するには，連文節分析が向いているといえるであろう。

次節では，矢印線による連文節分析の方法（図解）によって，漢文と日本語との文の構造の対照を行う（「連文節」は日本語文法における用語なので，漢文と対照するに当たり，以下，これを「句構造分析」と呼ぶことにする）。

4. 漢文と日本語文との対照

本節では，句構造分析の方法（図解）を用いて，漢文と日本語の文の構

造を対照する。例として取り上げるのは、「国語総合」の教科書によく載せられている、「朝三暮四」（『列子』）の本文（訓点付き）と、その書き下し文（日本語文語文）である（本文は、『国語総合』（平成24年3月検定済）筑摩書房 pp.366-367 による。本文を縦書きにして、矢印線を右側に付す）。

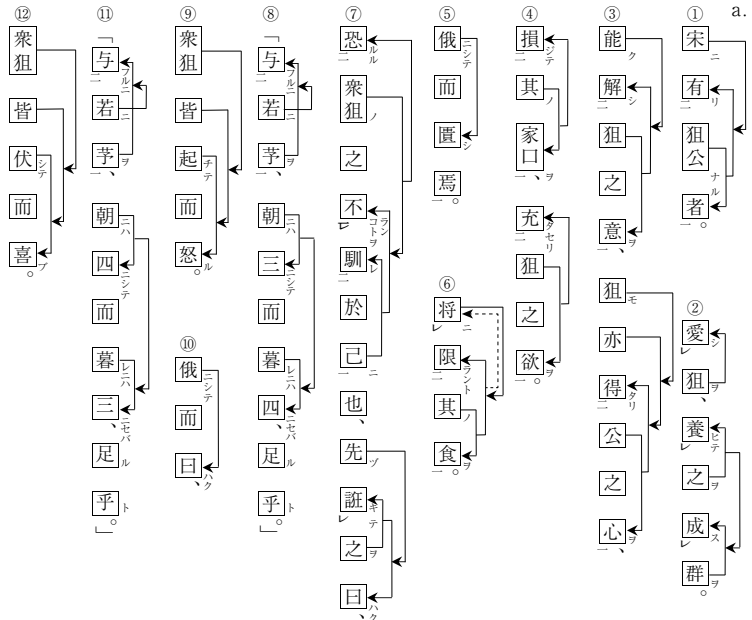
漢文の文の構造の解釈は、主に同教科書の訓読による。図解を簡潔にするために、原則として、虚詞（助字の類）には矢印線を付けず、また、従属節と主節、等位節どうし、主題と述部の間などでは、（適宜）矢印線を省く⁽²¹⁾。訓読の順序は、原則として、「矢印線の始点が、より前（縦書きでは上）、より内側にあるものから、矢印をたどって順に読む」（「より前」が「より内側」に優先する。例 01 d を参照）ことで示す。

日本語（書き下し文）の文の構造については、基本的に、文節を最小単位として分析する。ただし、原漢文の「不」に対応する「ず（ごらん）」は文節扱いにしておく（動詞との間に「-」を付けておく）。また、原漢文に対応する語のない（形式名詞などによる）文節や、（会話文の切れ目を示す）引用の「と」の前にも、「-」を付けておく。

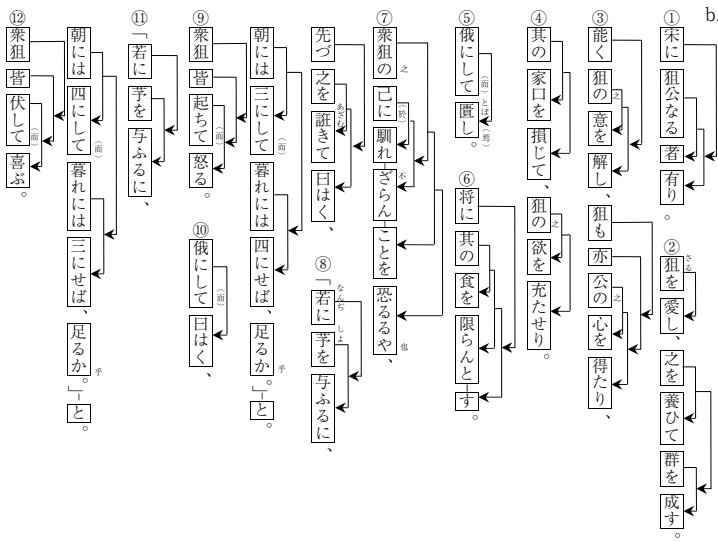
例 (25 a) と例 (25 b) とを比べて、まず大きな相違点として目につくのは、日本語では、つねに修飾成分（修飾語）が被修飾成分（主要語）に先行するのに対し、漢文では、修飾成分が被修飾成分に先行することも後行することもある、ということであろう。これは、言語類型的に、日本語が「主要部後置の言語」であり、中国語が「主要部前置と主要部後置が混在する」言語であることを反映するものである（井上 2002: 83-85）。

両言語で語順が逆になっている部分は、藤堂（1962: 54-55）の「補足関係」、または「認定関係」に当たるものである。補足関係は、述語と補語（目的語を含む）との関係で、漢文では、「述語-補語」の語順になり（「愛狙」、「成群」など）、日本語では、「補語-述語」の語順になる（「狙を愛す」、「群を成す」など）。認定関係は、否定などを表すもので、漢文では、

(25) a.

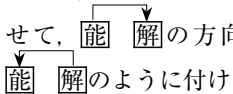




b.





「不馴」のように、否定する語（「不」）が否定される部分の前に来、日本語では、「馴れず」などのように、否定する語（「ず」）が否定される部分の後に来る。これらに対し、藤堂（1962: 54-55）の「主語述語関係」、「修飾関係」、および、従属節と主節とは、両言語で語順が同じになっている。

次いで、文の構造の対照において、問題になる点について、漢文を中心にあふれておく（以下、漢文の品詞の認定は、主に、佐藤・濱口 2017、および『古代漢語詞典 単色挿図本』商務印書館 2012 による）。

㊦「能」（文③）は、漢文では、助動詞（能願動詞）であるが、訓読する場合、副詞のように「よく」と読まれる。例（25 a）では、訓読に合わせて、の方向に矢印線を付けておいたが、助動詞としては、のように付けるべきであろう。

㊧「将」（文⑥）は、漢文では、副詞であるが、訓読では、再読文字として、副詞と助動詞（的な連語）とを兼務するように、「まさに（…んと）す」と読まれる。例（25 a）では、訓読に合わせて、のように、再読の方向にも点線の矢印線を付けておいた。これは、「古くは副詞で読むか助動詞で読むかいずれかであったが、平安時代中期頃から再読文字の用法が固定化して、今日に至っている」もので（沖森 2013: 17）⁽²²⁾、いわゆる「陳述の副詞」と文末の表現との呼応（「たぶん…だろう」など）に相当するものになっている。

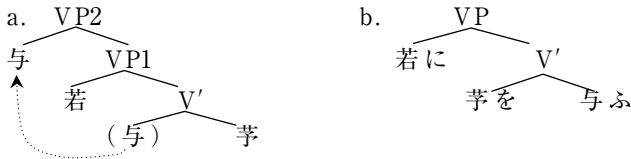
㊨「不」（文⑦）は、漢文では、副詞であるが、訓読する際は、助動詞の「ず」として読まれる。例（25 a）では、「不馴於己」を「否定句」と認めて、「不」を否定句における主要語として扱い、の方向に矢印線を付けておいた（これは訓読の方向と一致する）。「不」を一般の副詞と同様に扱えば、となる。

㊩「与若芋」（文⑧・⑩）は、原則どおりの矢印線の用い方では、文の構造（および（合わせて）訓読の順序）を示すことができないため、例（25 a）では、例外的に、矢印線を交差させている（日本語の「若に芋を

与ふ」には、このような問題はない。

この構文は、英文法で「二重目的語構文」と呼ばれるものに相当する。この文は、田中ほか（2004: 108-109）の英語の文における分析を援用すれば、Xバー理論によって、次のように分析（図解）される⁽²³⁾（日本語（書き下し文）の分析もあわせて示す（Hoji 1987: 193を参考にした）⁽²⁴⁾）。

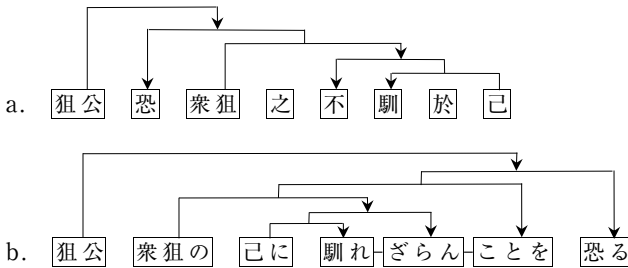
(26)



例 (26 a) の「(与)」は、実際の文では、この位置に「与」が現れないこと示す。「与」は、実際の文では、「若」の後（下）ではなく、「若」の前（上）に現れる（→で示されているように、「移動」と分析される。与 若 芋 (与 若 芋)⁽²⁵⁾ のようには分析されない）。例 (25 a) では、これを、訓読の順序とも合わせる形で、便宜的に、与 若 芋とした。

そのほかに、例 (25) では、多くの文（文②、③前半、④～⑧、⑩・⑪）において、主語が現れていないが、この（省略された）主語（主題）は、いずれも「狙公」である。文⑦には、「己」があるが、これが指すのは、文中に現れている「衆狙」ではなく、文中に現れていない主語（主題）の「狙公」である。「狙公」を文中に顕現させて、分析（図解）してみると、次のようになる。

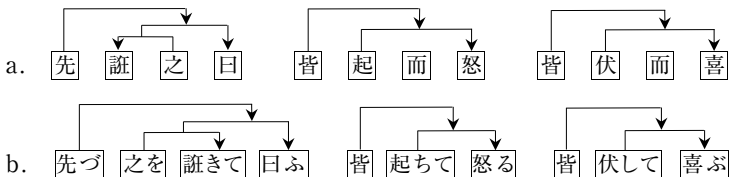
(27)



例(27)からわかるように、「己」は、「衆狙」のかかる範囲(句)内にあり、また、「狙公」のかかる範囲(句)内にもあるため、「衆狙」を指すことも、「狙公」を指すことも考えられる。この場合、「馴」の語彙の意味(「馬が人になれる。また、動物が人になれる。」(『新漢語林 第二版』大修館書店 2011: 1585))から、「己」が「狙公」を指すことになる。

最後に、連用修飾成分のスコープ(その副詞がどこまでかかるか)についてふれておく。例(25)では、文⑦後半の「先誑之曰」の「先」、⑨の「皆起而怒」の「皆」、⑫の「皆伏而喜」の「皆」を、いずれも、その後の部分全体にかかるものと解釈して分析(図解)した。句構造分析は、このような、要素間の関係を見るのに有効である。

(28)



5. おわりに

本稿では、漢文（古典中国語）の文の構造と日本語の文の構造とを対照して分析する方法（図解）について見てきた。その結果、両言語の対照には、句構造分析に依存（係り受け）関係を取り入れた方法が有効ではないかと考えた。今後、このような分析を漢文学習に活かす方法について、さらに探っていきたい。

《注》

- (1) これに関して、『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成 22 年 6 月）には、「『表現の特色』については、文章の形態や文体による特色をはじめとして、音韻、文字、表記、語句、語彙、文法など国語の各側面から考えることができる。これらのことは、国語を他の言語と比較することなどによってはっきりする。[中略] 文法に関しては、例えば、名詞や動詞を中心に、それらを形容詞や副詞が修飾し、助詞や助動詞がこれらをつないで文が成立するという文の基本的な構造における特色がある。」とある（文部科学省 2010: 28-29）。
- (2) 引用は、古田島（2017: 23）。風間ほか（2004: 69）には、「孤立語：形態素がすべて独立性のある語であり、語は語形変化をしない。したがって、主体と対象という主要な意味役割を表す語がなく、これらの意味役割は語の配列順によって表示される。中国語など。」「膠着語：内容語の文法的機能は、原則として内容語に付加される機能語（形態素）によって表される（これらの機能語・形態素を「接辞」と総称しておく）。日本語など。」とある。
- (3) 生成文法による分析では、かつて「日本語は、英語などとは異なり、[中略] 階層のない言語である」という議論があったが、その後、日本語は 2 項枝分かれの階層的な構造をなすとされている（中井・上田 2004: 146-149, Hoji 1987: 193）。
- (4) 永野（1958: 224, 218）によれば、「文節の関係」を示すには、「▽」の方式が「ふつう」であるが、→←の方式もあるという。ほかに、佐伯梅友の→←などもよく使われる（佐伯 1959: 66 など）。なお、佐伯（1980: 270-271）に

よれば、→←も、佐伯が早くに用いていた（『新日本女子国文法 高学年用』1938 修文館など）。以上、いずれも原文は縦書き。

- (5) 児玉（1987: 272）による。ただし、「名詞や動詞とそれに後置する助詞との依存関係」を示す矢印は省略した。Hudson（1998）では、主要語に縦の矢印線を付し、各語に品詞のラベル（略称）を加えている。
- (6) Hudson（2010: 147）では、修飾成分を「dependent」、被修飾成分を「parent」と呼んでいる。今日の代表的な英文法書である『The Cambridge Grammar of the English Language』では、前者を「dependent」（依存要素）、後者を「head」（主要語）と呼んでいる（Huddleston and Pullum 2002: 24, 同 2017: 51）。依存文法の創始者とされるテニエールは、それぞれを、「従属部 (subordonné)」、 「支配部 (régissant)」と呼んでいる（テニエール 2007: 4）。
- (7) 教育科学研究会・国語部会などの立場。
- (8) 橋本文法が学校文法の基礎として使われ続ける理由も、あいまいさが少ないという点にあるとされる。衣畑（2019: 304）は、「学校文法の意味」について、「『学校文法 = 橋本文法』とまで称されるように、橋本の文法論が国語科教育で主流を占めるようになったのは、湯沢幸吉郎や岩渕悦太郎などの優れた「橋本文法」解説者の存在もさることながら、徹底した形式主義による点が多い。いわゆる『正解』が強く求められる学校教育の現場において、誰もがその正解にたどりつくためには、解釈の揺れはどうしても避けられる必要があった。このことは、文法研究と文法教育との相違や、文法教育そのものの意味を考える契機にもなるだろう。」と述べている。文節については、「『分かち書き』ならぬ『分かち言い』の単位」であり、「文節は、文の内部構造を語る上では問題があるものの、『分かち言い』で『5時からあ、10時までえ』と言うような現実の発話を語るには、この上なく有効な概念だ」とする見方もある（定延 2019: 3-4）。
- (9) 「書いている」、 「読んでしまう」について、山田（2004: 27）は、「学校文法では2つの文節に分けますが、補助動詞は、働きから考えれば助動詞と同じ扱いをする必要があり、学校文法の不備な点です」としている。また、高本（1999: 542）は、「文節に区切るという作業自体には比較的曖昧性が少ない」としながらも、「独自に行った文節区切りに関する調査でも、補助の文節や、連体修飾の文節で区切りミスを誘発しやすいという欠点がある」と述べ、鈴木（1974: 28-29）は、大学生に文節句切りをさせたところ、補助動詞や形式名詞を含む部分（「住んでいるうちに」、 「飼うことにした」）に異同が見られたことを述べている。

- (10) この例（解釈・分析）は、伊坂（2013: 95-96）による。
- (11) この例（解釈）は、井上（2002: 95-96）による。ただし、分析（図解）は、伊坂（2013: 96）に従った。
- (12) 金水（1997: 145）は、これについて、「句→詞辞」、「詞→句詞」という「句構造規則」を挙げている。
- (13) Wells（1947）の例文。Wells（1947: 84）は、これを、「the || king ||| of ||| England | open ||| ed || Parliament」のように図解している。
- (14) 例（11a）の分析法は、大久保忠利の日本語文法論に「適用」されている。大久保（1977: 42）の「文分析」では、各成分・要素に、「ナニガ」、「ドウスル」などといった、文中における役割を表すラベルが添えられている。
- (15) V は動詞、V' は V が投射された句、VP は V が投射された最大の句、I は屈折辞、I' は I が投射された句、IP は I が投射された最大の句、NP は名詞句（△は、内部構造の省略を表す）、e は「空の文字列（音列）」を表す。
- (16) 北原（1981: 86）や島田（1988: 121）などによる「入子型構造図」のとらえ方。島田は、「入子型構造」の図解では、主語や連用修飾語が「宙に浮いたまま」述語と関連し、主語が連用修飾語と「並列のように」扱われて、述語との関連が明示されず、「国語の文の構造の本質を把握しきれないのではないかと考えられる。」と述べている。時枝自身がどう考えていたかははっきりしないが、「調べた人は知っているが、時枝自身は、決してどこでも複雑な文をその手続きで分析してはいない。」（大久保 1975: 53）、「ちょっとでも複雑な構造の文については全く言及されることがない」（北原 1981: 101）ともいわれ、あるいは、島田（1988: 124）の言うように、「時枝自身この項で学問的に国語の文の構造を把握しようとは意図していなかった」のかもしれない（島田は、時枝（1941: 311）の「単語の排列形式と入子型構造形式」の冒頭で述べられている「国語に於ける語の排列形式を全面的に考察して、思想表現の構造を明かにしたいと思ふ。」に注目している）。
- (17) 「元」は、樺島（1954）の用語（森岡 1963: 154）。樺島（1954: 26-27）は、「対等の関係を拡張して、一つの述語に対する主語と修飾語、また独立語とこれをうける文節、重文における句と句などをこめて、横にならぶ文節の関係」を「並立関係」と呼び、「並立関係の累加値」を「元」と呼んでいる。
- (18) 渡辺（1965: 62）は、例（18 b）について、（例 14 の「多枝状」の分析を挙げて）「多枝状文を単幹状にためなおそうとする」ものと見て、「同一の成分が、容易に立ち得る A 位置と B 位置との、どちらの方に現実に立つて

いるか、という違いだけのために、その文の構造が異つたものと把握されねばならぬ、とまで考えるのは形態の重視のゆきすぎであろう」と批判しているが、橋本（1953: 16）は「語順の上で述語に近いものはそれだけ述語の表す事態と緊密な関係を有する。」と述べており、「述語すなわち『切れる』文節を主発点として一つずつ大きな【連文節】を確認していくことが、個々の『文の成分』を理解するためのヒントになりうるのである。」として、これに「国語科文法への応用の可能性」を見る見方もある（佐藤 2014: 50）。

- (19) 山室（2008: 41, 49）によると、「昭和三〇年代半ばまでは、文の構造を文節という単位でとらえるのが主流であった。それが、昭和三〇年代後半から、文のより複雑な構造、より長い文の構造の説明に、連文節という考えが極めて有効であるということから次第に用いられるようになった。それと同時に、文の成分という単位も用いられるようになってきたのである。」、
 「昭和三〇年代からは、文の構造を説明するのに、どの教科書でも、文節、連文節、文の成分の三つの語を用いている。この事実は、文の構造を説明するときの大きな混乱の基となってきたように思われる。」という。
- (20) 橋本（1959: 179-180）の「文を構成する文節の群化（文節群又は連文節）」には、「前後に相隣接し直接に続く二つの文節をはじめの連文節とし、次に之と前後に直接に連る文節又は連文節とを合せて次の連文節とし、更に同様の方法によつて連文節を拡大し、文中のあらゆる文節を含む連文節に至つて終了する。」とあり、これは「2項枝分かれ」の「階層構造」に当たる。また、これに続き、「連文節の他の文節又は連文節への連続は最後の文節が代表する故、最後の文節の等次を以て、連文節を代表せしめる。」とあり、これについて、畠山ほか（2019: 147）は、「《最後の文節が代表する》は生成文法の《主要部》に、《最後の文節の等次を以て、連文節を代表せしめる》は生成文法の《投射》にそれぞれ対応すると考えられる。」と述べている。なお、畠山ほか（2019: 148）によれば、「日本語の統語構造が2項枝分かれの階層構造をなしていること」は、松下大三郎によって早くに示されていたという（松下 1928: 754-755）。
- (21) ここでは、「虚詞」は、佐藤・濱口（2017: 1693）に従い、前置詞、接続詞、助詞（構造助詞、語気助詞）、感嘆詞とする。その他、語順などについては、阿久津（2019）を参照。
- (22) 小林（1954: 50-51）によると、「将」は、「平安初期には直ちに辞の訓 [ムトス] によむか、副詞の訓 [マサニ] によんで補読語 [ム、ムトス、マジ] を持つかのいずれかであった」が、「平安時代中ごろ以後には再読の例が見

えはじめ次第に多くなって来る」という。

- (23) 田中ほか (2004: 108-109) は、英語の「二重目的語構文」について、「二重目的語構文の間接目的語は直接目的語を一方向的にc 統御する、すなわち前者は後者よりも構造的に高い位置にあると結論付けられる。」としている。
- (24) ちなみに、沖森 (2000: 156-157) によれば、『古事記』には、「AヲBニ〜スル」という構文が、「A〔動詞〕B」の「字順」で多く現れるという。沖森は、「食物乞大気津比売神」、「多祿給其老女」などの例を挙げ、「ここではヲを読み添えずに『食物、大気津比売神に乞ふ』『多くの祿、その老女に給ふ』などのように読むべき表記かと思われる。」と述べている。一方で、オールドリッジ (2016: 22) は、「変体漢文の語順は、随意的な間違いではなく、非常に規則性を持っている文体である」としている。
- (25) このように分析した場合でも、原則に従って訓読することはできない。「矢印線の始点が、より前、より内側にあるものから、矢印線を順にたどって読む」と、「若に与ふ芋を」となってしまう。

参考文献

- 阿久津智 (2019) 「漢文の係り受け構造の図解」『拓殖大学 語学研究』141 拓殖大学言語文化研究所 pp. 1-34
- 伊坂淳一 (2013) 「文の成分」中山緑朗・飯田晴巳監修、沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一編『品詞別 学校文法講座 第一巻 品詞総論』明治書院 pp. 92-117
- 井上優、町田健編 (2002) 『日本語文法のしくみ』研究社
- 大久保忠利 (1975) 『日本文法と言語の理論』春秋社
- 大久保忠利 (1977) 『新・日本文法入門 新版』三省堂 (初版 1973)
- 沖森卓也 (2000) 『日本古代の表記と文体』吉川弘文館
- 沖森卓也編 (2013) 『漢文資料を読む』(日本語ライブラリー) 朝倉書店
- E. オールドリッジ (2016) 「変体漢文の語順の派生過程」馬耀輝編『日本語の様々な姿を考える：黄憲堂教授記念論文集』致良出版社 pp. 21-40
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2004) 『言語学 第2版』東京大学出版会
- 樺島忠夫 (1954) 「文の構造について：文の構造と条件との分析の一試み」『国語国文』23-3 京都大学文学部国語国文学研究室・京都大学国文学会 pp. 25-31
- 北原保雄 (1980) 「佐伯文法のあゆみ」佐伯梅友、森野宗明・小松英雄・北原保

- 雄編『佐伯文法：形成過程とその特質』三省堂 pp.13-96
- 北原保雄（1981）『日本語の世界6 日本語の文法』中央公論社
- 衣畑智秀編（2019）『基礎日本語学』ひつじ書房
- 金水敏（1997）「国文法」大津由紀雄・仁田義雄・郡司隆男・金水敏『岩波講座
言語の科学5 文法』岩波書店 pp.119-157
- 郡司隆男（2002）『単語と文の構造』（現代言語学入門3）岩波書店
- 古田島洋介（2017）『これならわかる復文の要領：漢文学習の裏技』新典社
- 児玉徳美（1987）『依存文法の研究』研究社出版
- 小林芳規（1954）「漢文訓読史上の一問題：再読字の成立について」『国語学』
16 国語学会 pp.47-64
- 佐伯梅友（1959）『国語概説』秀英出版
- 佐伯梅友、森野宗明・小松英雄・北原保雄編（1980）『佐伯文法：形成過程とそ
の特質』三省堂
- 定延利之（2019）『文節の文法』大修館書店
- 佐藤進・濱口富士雄編、戸川芳郎監修（2017）「漢文読解の基礎」『全訳 漢辞海
第四版』三省堂（初版2000） pp.1692-1729
- 佐藤佑（2014）「「連文節」と「文節の群化」について：国語科における文法教
育との関わりから」『都留文科大学研究紀要』80 都留文科大学 pp.39-57
- 島田昌彦（1988）『国語における文の構造』風間書房
- 鈴木一彦（1974）「文節論の帰結」『国文学論集』12 山梨大学国文学研究室
pp.22-30
- 鈴木重幸（1972）「学校文法批判：動詞論を中心として」『文法と文法指導』む
ぎ書房（初出1954） pp.53-69
- 高本條治（1999）「文節関係解析木（文節木）について：解釈記録のための骨組
み」『上越教育大学研究紀要』18 上越教育大学 pp.537-554
- 田中春美・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・樋口時弘（1975）『言語
学入門』大修館書店
- 田中智之・寺田寛、荒木一雄・天野政千代監修（2004）『英語の構文』（英語学
入門講座9）英潮社
- ルシアン・テニエール、小泉保監訳（2007）『構造統語論要説』研究社（原著
1959）
- 藤堂明保（1962）『漢文入門』學燈社
- 時枝誠記（1941）『国語学原論：言語過程説の成立とその展開』岩波書店
- 時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』岩波書店
- 中井悟・上田雅信編（2004）『生成文法を学ぶ人のために』世界思想社

- 長田久男 (1995) 『国語文章論』 和泉書院
- 永野賢 (1958) 「学校文法」西尾実・時枝誠記監修, 熊沢龍ほか編『国語教育のための国語講座 第5巻 文法の理論と教育』朝倉書店 pp.209-264
- 永野賢 (1959) 「文・文節・連文節」『国文学 解釈と鑑賞』24-7 (第二特集 文論と文章論) 至文堂 pp.92-98
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』 明治書院
- 橋本進吉 (1934) 『国語法要説』 (国語科学講座Ⅵ 国語法) 明治書院
- 橋本進吉 (1953) 「文節による文の構造について (講演要旨)」『国語学』13 国語学会 (1944 講演) pp.12-19
- 橋本進吉 (1959) 「文を構成する文節の群化の観察法」『橋本進吉博士著作集 第七冊 国文法体系論 (講義集二)』 (1944 頃草稿) pp.179-191
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶 (2019) 「橋本文法とミニマリスト・プログラム: 連文節の構造と最小句構造の類似性」『信州大学教育学部研究論集』13 信州大学教育学部 pp.144-153
- Huddleston, Rodney and Pullum, Geoffrey K., 畠山雄二編, 藤田耕司・長谷川信子・竹沢幸一監訳, 本田謙介・深谷修代・長野明子訳 (2017) 『英文法と統語論の概観』 (『英文法大事典』シリーズ 第0巻) 開拓社 (原著2002)
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』 紀元社
- 森岡健二 (1963) 『文章構成法: 文章の診断と治療』 至文堂
- 森岡健二 (1964) 「文の構成」『国語と国文学』41-7 東京大学国語国文学会 pp.1-23
- 文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』 (平成22年6月) (文部科学省のウェブサイトで閲覧 (2019年9月))
- 山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』 くろしお出版
- 山室和也 (2008) 『文法教育における構文的内容の取り扱いの研究』 溪水社
- 渡辺実 (1965) 「橋本文法」『国文学 解釈と鑑賞』30-12 (特集 文法学説の整理: その長所と短所) 至文堂 pp.54-67
- [英語の文献]
- Fries, Charles Carpenter. 1957. *The structure of English*. London: Longmans
- Hockett, Charles F. 1958. *A course in modern linguistics*. New York: Macmillan
- Hoji, Hajime. 1987. Weak Crossover and Japanese Phrase Structure. *Issues in Japanese Linguistics*, ed. Takashi Imai and Mamoru Saito, 163-201. Dordrecht, Holland; Providence, U.S.A.: Foris Publications
- Huddleston, Rodney and Pullum, Geoffrey K. 2002. *The Cambridge grammar*

of the English language; Cambridge, U.K.; New York: Cambridge University Press

Hudson, Richard. 1998. *English grammar*. London; New York: Routledge

Hudson, Richard. 2010. *An introduction to word grammar*. Cambridge; New York; Tokyo: Cambridge University Press

Wells, Rulon S. 1947. Immediate constituents. *Language: journal of the Linguistics Society of America* (Reprint ed.) 23: 81-117

(原稿受付 2019年12月10日)